IV. 埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会の記録

平成 15 年度　埋蔵文化財展について

１展示会の経緯

平成14年度埋蔵文化財展終了頃、昨年度担当者により、次年度開催地候補の選定作業を進めつつあった。ちょうどそのころ、愛知県陶磁資料館より平成15年度企画展の一つとして、愛知県埋蔵文化財調査センター管理の遺物を中心に、昭和62年以来となる「新出土品展」を行いたく、ついては当埋蔵文化財センターと共催で行いたい、との申し入れがあった。埋蔵文化財センター内で協議の結果了解され、平成14年度10月から準備が始まった。なお、今回の展示は、愛知県陶磁資料館の瀬戸展 (愛知県陶磁資料館での展示を示す。以下同じ) のみならず、高浜展 (高浜市やきものの里かわら美術館での展示を示す)、また平成16年度に豊橋展 (豊橋市美術博物館での展示を示す) と巡回展示をした (表１)。

２実施体制

従来の埋蔵文化財展と異なるところは、愛知県埋蔵文化財センターの役割である (図１)。埋文センターは展示のコンセプト･企画のアイデア･遺跡遺物に関する情報の提供を行い、陶磁資料館側はそれを修正・監修したのち実際に展示を行うという役割である。なお、後述するイラストは最終的な仕上げをデザイナーに委託し、愛知埋文の方で監修を行った。

３展示の基本理念

今回の展示には、二つの点に重点を置いた。一つは「遺跡の展示を目指すこと」である。考古学の展示で多く見うけられるものは、あるテーマに沿った遺物を時代順に並べた展示である。遺物の説明としてその出土状態などをパネルなどで紹介するものの、遺物が主体となる展示になる傾向にあると言えよう。埋蔵文化財の調査に携わっているものとしては、出土遺物のみならず、遺跡の発掘調査成果をいかに展示・普及するかが、最重要課題であると考えられる。それは日ごろ行っている埋蔵文化財の調査の有効性を、広く示すことにほかならないからである。

表１　埋蔵文化財展開催期間一覧

展示名	会場 開催期間
瀬戸展	愛知県陶磁資料館 2003年８月30日～11月16日
高浜展	高浜市やきものの里 かわら美術館 2003年12月６日～2004年１月18日
豊橋展	豊橋市美術博物館 2004年４月24日～５月30日

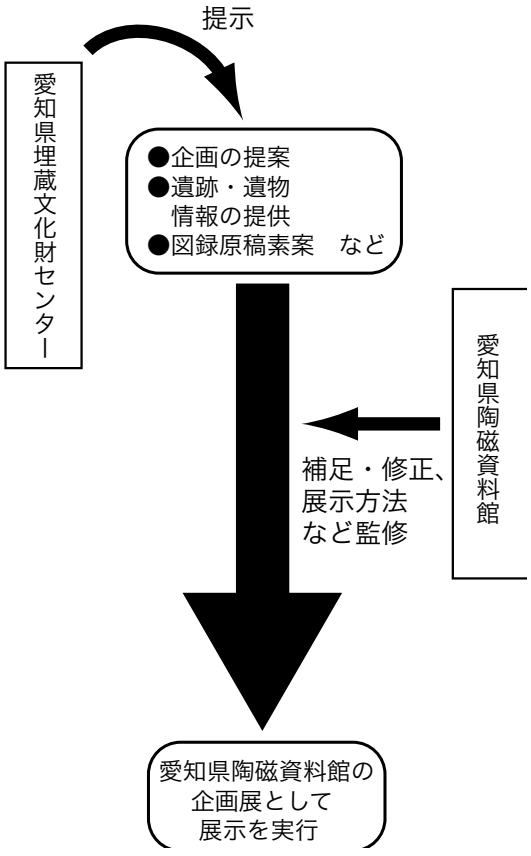


図１　埋蔵文化財展実施体制

もう一つは「展示により、受け手がいかに遺跡のイメージを膨らませることができるか」である。遺跡の発掘調査成果を示すために、遺物にまつわる遺構図・写真パネルを併用した展示が多い。考古学に携わっている者ならば、それを見て各人が遺跡のイメージをある程度もつことができるのであろう。しかし、普段、考古学に関わりの少ない方々がそれらを見て、果たしてどの程度遺跡に対するイメージを持つことができるのであろうか。

この展示では、特に埋蔵文化財に触れる機会の少ない方々に対象を設定し、一人でも多く愛知県の埋蔵文化財に親しみを持っていただけるような展示を志向した。

４具体的実施内容

上記の基本理念を実施すべく、展示作業および埋文講演会・講座を開催した。以下、その実施内容について報告する。

展示　瀬戸展では三部構成で行った（表２）。第二展示室で行った「掘りたての遺跡・洗いたての土器　埋蔵文化財速報展 2003」は、従来の埋文展で行っている速報展に近いものである。瀬戸展でのあり方を中心に、それ以外の展示についてコンセプトを提示する。

表２　埋蔵文化財展（瀬戸展）も展示構成

展示会場	展　示　名
第一展示室	歴史の風景 ー遺跡からのメッセージー
第二展示室	掘りたての遺跡・洗いたての土器 埋蔵文化財速報展2003
特別展示室	弥生神とのであい ー考古学・弥生ムラ縁起ー

「歴史の風景―遺跡からのメッセージ―」

この展示は、陶磁資料館側から「新出土品展」として通史的な展示を企画されたものである。埋文センターとしては、遺跡の展示を行うに際し、発掘調査の成果をもとにいかに当時の景観(風景)

（1）調査時の遺構写真



（2）出土遺物



（3）風景イラスト

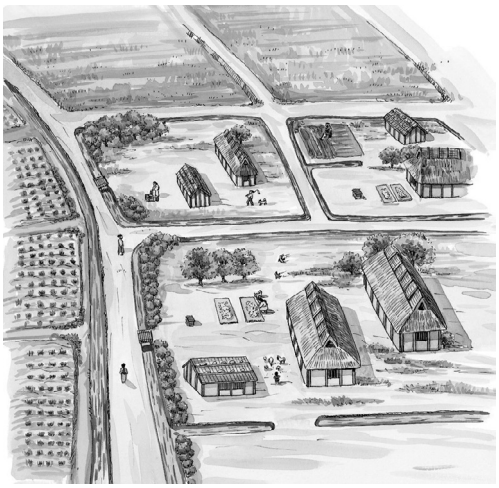
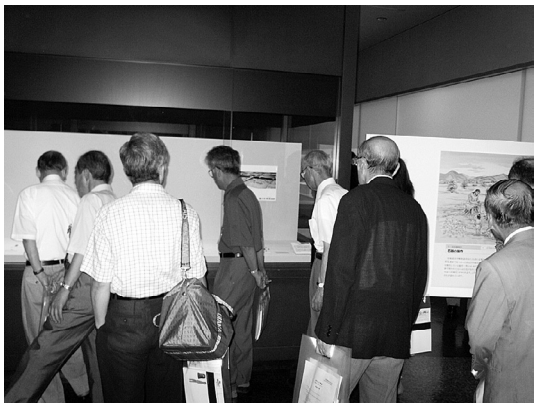


図２　「歴史の風景」遺跡展示コンセプト（例は郷上遺跡）

を復元できるのか、という視点に立つことを考えた。具体的には(1)調査時の遺構写真、(2)そこから出土した遺物、そして(3)その写真から復元された風景(展示では「風景イラスト」と呼称)を三位一体として、その遺跡の在りし日の一場面を視覚的に訴える展示にした(図2)。

展示に使用した遺跡は、前回の「新出土品展」以降の発掘調査成果が報告されている遺跡に限定した。今回の展示で、上記の(1)～(3)を三位一体として展示しうる遺跡として、後期旧石器時代1・縄文時代2・弥生時代3・古墳時代2・古代4・中世2・近世3・近代1の、計18遺跡を選択した。この風景イラストでは表現できず、かつ愛知県の歴史を紹介するために補足が必要と考えられる項目に関しては、陶磁資料館側と協議の上、別途項目立てを決定した。



埋蔵文化財展会場風景

「弥生神とのであい―考古学・弥生ムラ縁起―」

濃尾平野における縄文時代から弥生時代へのムラの移り変わりを、架空の人物を設定して物語風にしたイメージ展示である。根幹となる考古学的事象は、ムラの半分が洪水対策と考えられる環濠をつくりながらも洪水によりムラが壊滅したとされる、一宮市猫島遺跡の調査成果である。それに清洲町ほか朝日遺跡におけるここ数年の発掘成



図3　「弥生市場のチラシ」

「弥生神とのであい」ストーリー内容

今から2,500年前のある夏の日
濃尾平野北部の縄文ムラ「ネコジマムラ」を大洪水が襲った。
ムラは壊滅的な打撃を受け
ムラ人の多くが死に、住まいが流された。
残された人々の中から、一人の若者「ダイチ」が選ばれる。
ムラを蘇らせる知恵を探るために湿原のムラ
「アサヒムラ」に向かうことになった。
ダイチはそこで始めて「弥生神」と出会う。
湿原の民、アサヒ部族が住むアサヒムラは
周りを幾重にも大きな濠が巡る巨大なムラであった。
そこには大きな市場があり
たくさんの見知らぬ品物や豊富な食べ物があった。
それを求めていろいろな部族が集まってきていた。
ダイチはこの弥生市場で、北から来た旅人「クルス」と出会う。
旅人、クルスの話から、弥生神を祀る各地のムラむらの様子や
そこでの暮らしを聞くことになる。
そして洪水からムラを護るための知恵を得る。
やがて弥生神の洗礼をうけたダイチは
故郷、ネコジマムラに戻っていく。
ムラに戻ったダイチは、濠と堤を作ることを企画する。
そしてムラはダイチの指導で、弥生ムラへと生まれ変わる。
やがて冬の終わりに、ネコジマムラを再び大洪水か襲う。
しかし巧みに地形を利用した
濠と堤によって見事にムラが護られる。
ダイチは人々から尊敬され
やがて部族のお墓にムラを護った英雄として祀られる。
ダイチは、精霊として長く語り継がれることになる。



図４　「企画書」

果を基に、９つの場面からなるストーリーを作成した(前頁下に掲載)。展示はその場面ごとに行われた。

この展示では、「朝日ムラ」で行われていたとされる「弥生市場のチラシ」や猫島ムラを洪水から救うための「企画書」など、考古学的成果をできるだけ現代の我々が実感しやすいように工夫したのが大きな特徴である(図３・図４)。

埋蔵文化財講演会および埋蔵文化財講座

今年度は表３のように開催した。埋蔵文化財講演会は、明治大学の石川日出志先生にお願いした。先生は、縄文時代から弥生時代への変遷を、最近の成果を交えながら日本列島のみならず韓半島・中国という東アジア的視点から解説される一方で、ここ愛知県の状況に関しても分かりやすくご講演していただけた。

埋蔵文化財講座は「愛知考古学セミナー」として、時代別に６回開催した。骨子は、最近の調査成果を中心に分かりやすく説明するというものであり、その中で展示解説も若干行った。具体的には、すべてのセミナーを通してパソコンによるプレゼンテーションを中心として、映像を主体とした構成をとった。

表３　埋蔵文化財講演会・講座一覧

埋蔵文化財講演会

９月６日	明治大学教授　石川日出志氏 「2500年前の風景」

埋蔵文化財講座(担当は埋文センター職員)

開催日	内容	担当者
8月30日	旧石器・縄文	赤塚・川添・堀木
9月20日	弥生	永井(宏)・蔭山・宮腰
10月 4日	古墳	樋上・早野・赤塚
10月18日	古代	池本・永井(邦)・川添
11月 1日	中世・戦国	小澤・鈴木・川添
11月15日	近世	松田・武部・鬼頭





埋蔵文化財講演会風景

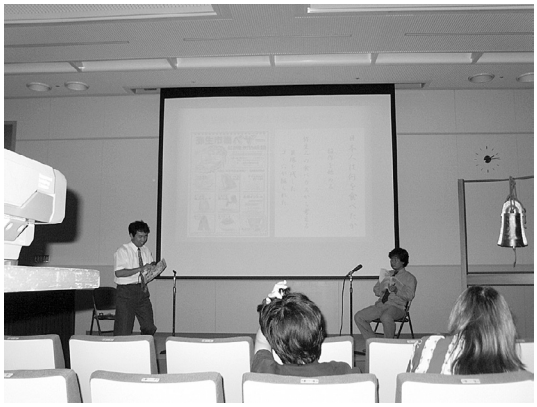
５展示図録について

図録の作成は、陶磁資料館側の項目立てに従い、文字原稿の多くを埋文センター側が受け持った。陶磁資料館側の依頼に基づき、対象とする読者を中学卒業以上の一般の方とするなど、埋文センター側で原稿執筆要項を作成し、それに基づき各職員が分担執筆を行った。最終的な文字原稿は、陶磁資料館側によりさらに推敲が行われた結果のものである。なお、掲載写真・挿図は埋文センターと陶磁資料館との協議により決定した。

６今後の課題と提言

今回、当センターにおいて他機関との共催という形で埋蔵文化財展を行ったのは初めてである。このような体制をとることは、展示をはじめとする普及活動に厚みが出でくる効果が期待でき、今後の埋蔵文化財展を行う上でも新たなる方向性として、有意義であろう。

今回のようなコンセプトをもった展示は、これまでそれほど多く行われていないと思われる。それは、これまで考古学に携わっている人たちがいわば触れなかった部分だからである。それは「歴史の風景」の「風景イラスト」に関して寄せられた反応が如実に物語っている。(1)「風景イラスト」があって分かりやすかった、という意見と、(2)展示に主観を入れるのはよろしくない、というお叱りの意見である。(2)のご意見からは、ある種、考古学の現状が伺えられる。それは我々が調査・研究している事柄は、当時の風景からすると、実にごくごくわずかな部分でしかない、ということである。それを絵(風景イラスト)にするとかなり足りない部分が出てきてしまい、いわば「想定」の部分を充填せざるをえないのである。考古学に携わる者の多くはそこで躊躇し、遺物などいわば「客観的」資料のみを提示し、解釈を観覧者側それぞれに預けてしまう場合が多い。しかし、一般普及事業としてそれで充分なのであろうか。今回の「風景イラスト」は考古学的見地からして問題が多いのは事実であり、埋蔵文化財講座の中でも各講師によって多く指摘していただいている。非常にありがたいことであり、外部の研究者の方からも是非これからもそのような意見が公表されることを期待する。さらに言えば、普及事業としてこのような復元図なりが多数作られれば、一般の人たちもその中から選択して、当時のイメージを持つことが可能となるであろう。そうすれば、これまで埋蔵文化財に関して関心の深くなかった人たちにも、より埋蔵文化財に親しんでいただけるようになるのでは、と考えるのである。(川添和暁)





埋蔵文化財講座風景

(埋蔵文化財展入場者数
愛知県陶磁資料館：7,609 名
高浜市やきものの里かわら美術館：1,375 名)